

■日 時：2019年10月6日（日）【世界宣教日】

■場 所：立川教会

■説教題：「信仰の戦いと永遠の命」

■説教者：飯島 信

■聖 書：旧約 アモス書 8：4-7（旧 p1439）

新約 テモテへの手紙一 6：1-12（新 p389）

■讚美歌：58「み言葉をください」 517「神の民よ」

お早うございます。

私たちが所属する日本基督教団では、今日 10 月 6 日は世界宣教日です。又来週 10 月 13 日は神学校日、つまり、本日は教団から世界に派遣されている宣教師たちの働きを覚えて祈る日、来週は神学校で学ぶ神学生を覚えて祈る日です。今週と来週、神様からの召命に応えるとはどのような事かをご一緒に考える時としたいと思います。

ところで、宣教師ですが、日本基督教団から海外に派遣されている宣教師は決して多くはありません。派遣先は現在 11 ヶ国、インド・シンガポール・フィリピン・台湾・韓国・アメリカ・カナダ・ブラジル・パラグアイ・ベルギー・ドイツです。

ところで宣教師ですが、たとえ召命を受けても、実際に海外に伝道に出ることは容易ではありません。その理由を以下に述べます。

もし私が今、海外に宣教に出る召命を受けたとします。アジアかアフリカか、南米か、いずれにしても伝道の困難な地を選ぶとします。召命を受け、それを実現するためには、まず立川教会を辞し、私が自分自身の手で私を海外に送り出す支援者を見つけ、支援グループを組織しなければなりません。教団には、宣教師を送り出す資金が無いからです。つまり、今、日本人教会以外で働いている宣教師は、皆さん自分自身で支援者を見つけ、支援グループを組織して、宣教の業を担っています。ですから、支援グループは、毎年、彼／彼女の生活のための資金を集めて送っています。資金を集められなくなった時、その宣教活動は終わります。

教団が、送り出す宣教師の生活費の面倒を見ることが出来れば理想です。しかし、現実には、教団にはそのような力はありません。にもかかわらず、宣教師の希望者は後を絶たず送り出されています。彼／彼女の生活の面倒を見る支援者、支援グループが必ず与えられるからです。

ところで、もう少し広く世界宣教について考えます。

私は、この 10 年近く、私の母校である日本聖書神学校で、アジア・キリスト教史を神学生と共に学んで来ました。そして、改めて気づかされたのです。パレスチナの一地方で生まれたキリスト教が今日のような世界宗教となるために、どれだけ多くの宣教師たちの犠牲があったかと言うことです。私は、アジアの中でも、中国・韓国・フィリピン・ベトナム・タイ・インドにおけるキリスト教の歴史を学びました。それぞれの国々のキリスト教伝来と

その歴史について、今は詳しくお話しする事は出来ませんが、それでもどの国でも言えることは、必ずキリスト教への迫害が起こり、多くの宣教師や信徒たちが命を落としていることです。あたかも、キリスト教宣教の歴史は、宣教師や信徒たちが流した血によって精練されて行ったとも言えるかのようです。

それでは、宣教師たちが宣べ伝えて行った福音とはどのようなものであったのでしょうか。

まず一般では、キリスト教以外のほとんどの宗教では、信じることによって御利益があると教えています。家内繁盛、無病息災などはその典型的なものです。信じれば、家庭内は安泰であり、仕事は成功する。信じれば、病気にかからず、災いも降りかからない。そのように教えて人生の幸福を約束します。但し、信じるだけで、約束されるわけではありません。お布施、つまりお金が求められます。しかも、その宗教に捧げるお金が多ければ多いほど、幸せも又多く得られると教えています。

さて、私たちの信じているキリスト教はどうでしょうか。

キリスト教の教えは、今述べた御利益宗教とは対極にあります。

キリスト教は、信じたからと言って、人生の幸福を約束してはいません。

信仰によって、家内繁盛、無病息災が得られるなどと教えてはいません。

キリスト教が教えるのは、徹頭徹尾、自分のことではなく、他者のことです。他者、即ち隣り人のことです。

自分に関心を持つことではありません。

他者に関心を持ち、他者に仕え、他者のために生きることです。

それは、自分を捨て、自分の十字架を背負って生きることを意味します。

新共同訳聖書 77 頁、マルコによる福音書第 8 章 34 節を読みます。キリスト者として生きるとはどのような事かが記されています。

31 節からお読みします。

【マルコによる福音書 8:31-38】 (p77)

ところで自分を捨てるとはどのようなことでしょうか。

それは、自分自身の利益を求めずに生きることです。

神を愛し、隣り人のために生きることです。

決して至難な、難しいことではありません。私たちも又時にそのような生き方をしています。例えば、礼拝後の昼食のために、無心にその準備をすることです。食材を買い、調理する。自分のためではなく、他人から称賛を浴びるためでもなく、ただ無心に、他者の喜びのために行く。それが自分を捨てることです。会堂に飾る花を買う。庭の手入れをする。教会

事務をたんとこなす。みな、自分のためではなく、他人から称賛を浴びるためでもなく、神様の御業に与るため、他者の喜びのために行く。それが自分を捨てることです。

そして、自分の十字架を背負って生きるのです。

自分の十字架を背負って生きるとは何か。それは、自分しか愛せない己を知ることです。神を愛するより、自分を愛する、隣り人を愛するより、この自分を愛する己の現実を知ることです。そして、そのような自分を認めて生きることです。自己中心にしか生きられない己の現実を認め、それを自分の負うべき十字架として背負い、主イエス・キリストに従って行くのです。その道は、しかし絶望の道ではありません。それこそが、命に至る道、救いに至る道です。

私たちが生活している現実には、ある“時”は神の国に招き入れられており、又ある“時”は神の国に背を向けて生きています。自分のためではなく、他者のために、他者の喜びのために生きる時、私たちは神の国に招き入れられるに相応しい“時”を生きています。しかし、自分の利益のため、自分さえ良ければとの自己中心の生き方に陥る時、私たちは神の国に背を向けた“時”を生きるのです。これらの戦い、神の国に招かれるのか、神の国に背を向けて生きるのか、この戦いは、信仰と不信仰との戦いであり、一刻一刻、息もつかせることのない戦いでもあります。

しかし、それだからと言って、私たちは緊張の連続の中を生きているわけではありません。勝利が約束されているからです。この戦いは、私たちに先だって、すでに主イエス・キリストが私たちに代わって戦い、勝利を収めて下さいました。そのことを信じて、そのキリストの後を追って行けば良いのです。自分を捨て、神を愛し、自分を捨て、隣り人を愛し、ひと時もイエス様が自分の十字架を代わって負って下さっていることを忘れることなく生きるのです。

神の国に背を向けさせるいかなる誘惑の嵐が自分を襲おうとも、あるいは、神の国の存在さえ見失うかのような人生の試練の嵐が激しく自分を襲おうとも、信仰に立って堅く動かされず、「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」(ルカによる福音書 12:32) というイエス様の約束を信じて生きるのです。

どの国においても、宣教師たちは、今述べたような福音を携えて宣教の地へと分け入って行きました。もちろん、16世紀に始まるカトリックの修道会を中心とした海外宣教の歴史は、ポルトガルやスペイン本国のアジアやラテンアメリカに対する植民地政策とは無縁ではありません。その後のオランダやイギリス、アメリカなどによる海外宣教の歴史も、カトリック・プロテスタントを問わず、本国の対アジア・ラテンアメリカ・アフリカに対する武力による侵略の尖兵を担った事実も否定出来ません。その罪は、植民地とされた国々に対するいかなる謝罪をもってしても赦されることが出来ない一方、それを理由として、宣教の歴史の全てを否定することは出来ません。何故なら、彼らの宣教の歴史は、又殉教の歴史でも

あったからです。さらに、彼らの宣教なくして、キリスト教が世界宗教になることは有り得ませんでした。

西欧諸国の海外侵略の歴史的事実と、そのことに深く関わる海外宣教の歴史をどのように評価するのか、私たちはそれぞれの国のキリスト者たちにその評価を委ねたいと思います。私たちにとってはまず日本です。

1549年のフランシスコ・ザビエルによるキリスト教伝来と徳川幕府による禁教令、それに伴うキリシタン弾圧の歴史と明治以降の日本人キリスト者の歩み、そして私たち……。数えて見れば、鹿児島にザビエルが上陸してから 470 年です。ザビエルが日本にキリスト教を伝えてから 400 年の後に、私たちの立川教会が産声をあげ、来年創立 70 年を迎えます。つまり、立川教会は、日本のキリスト教の 400 年の歴史をも背負っているのです。

今日与えられた旧約聖書のアモス書 8：4-7、及び新約聖書のテモテへの手紙一 6：1-12 は、宣教師たちが訪れた宣教の現場で見聞したこの世の出来事でした。そのような現実に対し、彼らはここに記されているキリスト教の福音を宣べ伝えて行きます。驕り高ぶる権力者には審きの預言を、又人々には、信仰の戦いと永遠の命に至る道を教えました。

世界宣教のこの日、しばし、世界各地に遣わされている宣教師を心に覚え、又私たちの立川教会も又、宣教師によって日本にもたらされた福音によって、この地に生れたことを改めて心に覚える時としたいと思います。

祈りましょう。